
はじめに

「専門図書館」とは国立図書館、公立図書館、大学図書館、学校図書館以外の図書館で、特定分野の資料・情報を収集提供する図書館である。

専門図書館の全国規模の団体である専門図書館協議会が3年に1度刊行している専門図書館のディレクトリー『専門情報機関総覧』の2015年版には1660機関が収録されている。これは、公共図書館の総数3261には遠く及ばないものの、大学図書館（大学の本館、分館・分室と短大・高専）の総数1677と並ぶ数である（公共図書館、大学図書館の数は、日本図書館協会の『日本の図書館——統計と名簿 2015』による）。あらゆる分野について、専門図書館があると言ってもよいが、その実態は千差万別である。

本書は、専門図書館のうち、企業、団体などが設置している「組織内ライブラリー」に的を絞り、そこで働いている、あるいは、その予備軍を第一の読者に想定した。

私は、経団連ライブラリーに43年間勤め、一貫して専門図書館員として仕事をした。本書は、そんな私の経験知を記したものである。したがって、理論的でも教科書的でもない。

長く専門図書館に勤めたとはいえ、総合経済団体の事務局の中の図書館、つまり、ビジネス系の専門図書館の経験しかないので、メーカーの研究所などに属する自然科学系・技術系の専門図書館

の仕事や、一般の人々に広く公開している公開専門図書館については言及していない。

専門図書館は1館1館が個性的で、テーマ、扱っている資料、運営方法等もそれぞれ違うが、専門図書館における仕事の基本的なことで、共通する心構え等は同じだと感じる。

私は2004年度から毎年、専門図書館協議会主催の教育プログラムで、新人（経験3年以内）を対象とした研修「専門図書館の仕事コース」の講師を務めている。本書のⅠ部、Ⅲ部には、その内容も一部盛り込んだ。

専門図書館では、どんなに理論・理屈がわかっていても、実際のレファレンスサービスができなければ、役に立たない。Ⅱ部では、私が実際に行ったレファレンスのケースを紹介しつつ、利用者の要求をどのように把握・理解し、どうすれば満足してもらえるサービスができるかを具体的に例示した。

40年以上、同じ職場・同じ職種で仕事をしたが、日々対応した業務（特にサービス業務）はすべて違い、工夫の余地も大きく、非常に楽しかった。私の経験が、専門図書館に関わる方々の参考になり、どうすれば豊かな気持ちとやりがいを伴った仕事ができるかを理解する一助になれば幸いだ。おわりに、本書を世に出してくださった樹村房の大塚栄一社長と、編集者の石村早紀氏に心からお礼申し上げる。

2016年8月

村橋勝子

情報便利屋の日記 もくじ

はじめに…………… 1

I 部 専門図書館の世界

- 1 図書館と情報…………… 7
- 2 専門図書館とは…………… 15

II 部 情報便利屋の日記

- 1 悪魔と天使…………… 33
- 2 一を聞いて十を知れ…………… 41
- 3 「ダレ」って誰?…………… 47
- 4 図書館はシステム…………… 55
- 5 Special assistance…………… 60
- 6 情報部門のスタンス…………… 67
- 7 男はつらいか…………… 73

8	英文法令社の心意気……………	81
9	友あり、遠方より助く……………	88
10	「職」と「食」……………	97
11	産業史50年……………	104
12	偉人の物語……………	111
13	出向ライブラリアン制度……………	120
14	予算折衝……………	130
15	ライブラリー業務のテリトリーを超えて……………	137

Ⅲ部 専門図書館の人財

1	優れた情報サービスのために……………	147
2	専門図書館のPR……………	161
3	展示会で情報提供……………	177
4	ライブラリアンとツールづくり……………	187

Ⅱ部	初出一覧……………	197
さくいん		

I
部

専門図書館の世界

専門図書館、とりわけ企業等の組織内ライブラリーの職員は、社内の人事異動によって配属された人が少ない。しかし、資料・情報を扱う専門図書館の仕事については、社内研修もほとんどない。上司や先輩も同様のケースが多いから、指導者を求めることも難しい。大学における図書館情報学や司書課程でも専門図書館について詳しい内容が教授されることは少ないので、図書館情報学を修め、新規採用された人も、十分な理解があるとはいえない。

そのような状況を鑑み、I部では、専門図書館に採用・配属された新人（年齢にかかわらず、経験3年以内）を主な対象に想定して、専門図書館についての基礎的な知識を一通り解説する。

一口に「専門図書館」といっても千差万別で、所属機関が違えば、テーマ、扱っている資料、運営方法も全く違う。したがって、I部では、分野・機関を問わず、専門図書館に共通することにとどめる。

1 図書館と情報

図書館とは

専門図書館の話をする前に、専門図書館の上位概念である「図書館」と、関連する「情報」について考えてみよう。

図書館(library)の定義・機能・構成要素

何事も、定義を知りたい場合には、辞典や事典を見れば書いてある。

一般的な辞典『広辞苑』には「図書・記録その他の資料を収集・整理・保管し、必要とする人の利用に供する施設¹」とあり、図書館の専門事典には「人間の知的生産物である記録された知識や情報を収集、組織、保存し、人々の要求に応じて提供することを目的とする社会的機関²」（『図書館情報学用語辞典』）とか、「記録された知識・情報を収集・整理・保管して、利用に供する施設³」（『図書館用語集』）とある。

辞典だけでなく、法律でも必ず「定義」がなされている。

「図書館法」(最終改正…平成23年12月14日 法律第122号)は第2条で「図書館とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は一般社団法人が設置するもの(学校に附属する図書館又は図書室を除く)をいう」と定義している(同法でいう「図書館」は基本的に「公共図書館」を指す)。

次に「図書館の機能」を見てみよう。

『図書館ハンドブック』では「資料を収集、整理、保存し、それを利用に供することは、図書館の基本的機能である。図書館のもつこれらの、いわば内在的機能は、時代によって、どの機能に重点をおくかは異なっても、機能そのものは時代を越えて変わることはない」とある。

こうやって見てみると、図書館の定義と機能は重なっている。

図書館を構成する要素として、同ハンドブックでは、資料、利用者、施設の三つを挙げているが、私はこれに「図書館員」を加えて、4要素としたい。どれが欠けても図書館ではないが、特に、サービスに人(図書館員)が深く関わり、人が重要な役割を果たしているところに、図書館の大きな特徴があるからだ。

図書館の意義

さらに大切なのは、図書館の意義を認識することである。「意義」とは「事柄などのもつ価値や

重要さ」である。どんな仕事でも「定義」だけでなく、その人なりの「意義」を見出した人が、やりがいを持つていい仕事をするし、成功もする。

図書館には重要な意義が二つあると私は考える。

① 図書館はシステムである

第一は「資料・情報を的確かつ効率的に収集・整理・保存・提供する システムである」ということだ。

ここでいう「システム」とはコンピュータシステムのことではない。言い換えれば「仕組み」だ。しかも、そのシステムは非常に合理的で、また、汎用性を持つている（Ⅱ部4「図書館はシステム」参照）。

② 時や空間を超えて利用者と資料・情報を結びつける所

第二の意義は「利用者と資料・情報を、時間あるいは空間を超えて結びつける所」ということだ。大昔のものでも、海外や地方の出版物でも、利用者が必要とする時にサッと提供できる。そのために、図書館は資料を収集・蓄積・保存しているのである。図書館に大量の蔵書があるのはそのためなのだ。

図書館というと「館」という文字が入っているために、いまだに「本や雑誌といった資料がたくさんあって、見せてくれる、貸してくれる所」と、機能より施設やモノに重点を置いてイメージされがちである。

しかし、図書館とは「知識・情報を整理し、探すシステム」であり、「時や空間を超えて利用者と情報を結びつける所」なのだ。もともと「時と空間を超えて」というのは、一つの館だけではできないから、図書館総体としてゝだが……。

だから、図書館員（ここでいう図書館員とは、必ずしも「司書」に限定しているわけではなく、広い意味で「図書館で働く人」を指す）は「システム」や「構造」を理解していなくてはならない。

図書館サービスの特性

図書館サービスの特性は「人的サービスと物的サービスが複合した、知的な労働集約的サービス」ということである。

知識・資料を有機的に結びつけ、体系化し、一つの構造に構築する。そして、長期にわたって資料を保存し、膨大な資料の中から即座に探し出して、いつでも利用者に提供できる——その手法・方法論がライブラリー・サイエンス（図書館情報学）であり、それを使ってシステムティックに仕事をするのが図書館員というわけである。

情報とは

次に「情報」について考えてみよう。「情報」とは何だろうか。

『広辞苑』をひいてみると

①あることがらについての知らせ（「極秘」）

②判断を下したり行動を起こしたりするために必要な、種々の媒体を介しての知識（「が不足している」）

とある。

『図書館用語集』には、

事実、思想、感情などが他者に伝達可能な形で表現されたもの。情報の発信者（送り手・情報源）と受信者（受け手）との間を媒介するものをメディア（媒体）といい、音声、文字、図形、電波などがこれにあたるが、さらに書物、テレビ、ラジオ、電話、磁気テープなどの具体的な（もの）を指して言うこともある。厳密にはこれらのメディアによって発信者から受信者に伝えられるメッセージ（message）の意味・内容を情報といい、特に情報科学においては、このメッセージから無駄な部分や重複部分を除き、あいまいさをなくして、量的に測定可能な形にしたもの、あるいは数字（機械語）に変形して蓄積できるものを指している。⁶

とある。

情報はあふれているか？

ところでもう大分以前から「情報洪水」とか「情報が溢れている」ということがしばしば言われる。本当にそうだろうか。

実は、私たちの周りには「データ」「知識」「知恵」「情報」が混在している。これらはしばしば混同されるが、全く違うものなのだ。

①データ (data)

データは、大量にあふれているが、個別的・断片的で、それだけでは意味を持たない。一つずつバラバラで、ジグソーパズルの一片と同じなのだ。

②知識 (knowledge)

「知識」とは「ある事項について知っていること。また、その内容」「物事の正邪などを判別する心のはたらき」(『広辞苑』)である。

私なりに補足すると、バラバラのデータを整理して、一般的な評価や体系化がなされたもので、全体としてひとつにまとまろうとする性質を持っている。つまり、秩序・構造がある。例えば「経済学の知識」「化学の知識」……というように。

③知恵 (wisdom)

「知恵」は「物事の理を悟り、適切に処理する能力」(『広辞苑』)と定義されているが、私は「個人の経験を通して、知識に豊かさが加わったもの」、つまり、「個人の学習効果が反映されたもの」と捉えている。

例えば、梅干しづくりに見られるおばあちゃんの知恵袋などがその顕著な例だ。レシピを見れば材料や作り方の手順は書いてある。これが「知識」だ。ところが、お婆ちゃんの梅干しが美味しい

のは、どんな天気の時にも、どれくらい干せばよいかなど、長年の経験から得たノウハウがあるからだ。

知恵は、職場でも、よく見ると、仕事のやり方などに現れる。同じ仕事をやっているのに、あの人はとても早くしかもきれいにできるなんてことがあるはずだ。

④ 情報 (information)

これらデータや知識や知恵が、特定の状況や目的、特定の人にとって、ある有益なものに轉換したもの——それこそが「情報」なのである。

データ、知識、知恵、情報の四つを明確に区別してみると、情報はあふれてもいなければ飛び交ってもいい。大量にあふれているのは「データ」であって、むしろ、欲しい情報はなかなかない。現代は「情報化社会」と言われるが、正確に言えば「データ社会」なのだ。

「インターネットで何でもわかる」とよく言われる。確かに、電車の時刻、天気予報、店の場所や開・閉店時間など、単純な事実を知りたい時にはインターネットは便利だ。しかし、図書館が提供する「情報」は、生活や仕事をより豊かにするもの、何か新しいものを生み出すものであるはずだ。

コンピュータは論理の機械であり、大量処理も得意である。しかし、コンピュータが提供するものは、単純で明白なことや過去の事象といった「データ」である。一方、人間は、大量処理や論理

的にはコンピュータほど優れてはいないが、驚くほど多様な能力を持っている。

コンピュータと人間がそれぞれ強みを發揮し、弱点を補い合い、共存して仕事をすれば、ライブラリアンは、情報化社会の交通整理に大いに専門性を發揮できるはずである。データを情報に変える——それがライブラリアンの役割だからだ。

引用文献

- 1…新村出編『広辞苑 第6版』岩波書店、2008年、2016頁。
- 2…日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典 第4版』丸善出版、2013年、172頁。
- 3…日本図書館協会用語委員会編『図書館用語集 4訂版』日本図書館協会、2013年、219頁。
- 4…法務省大臣官房司法法制部編『現行日本法規 37教育(2)』ぎょうせい、差し替え式
- 5…日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編『図書館ハンドブック 第6版補訂版』日本図書館協会、2010年、3頁。
- 6…森岡健二ほか編『集英社国語辞典 第2版』集英社、2000年、80頁。
- 7…前掲書1、1397頁。
- 8…前掲書3、131頁。
- 9…前掲書1、1794頁。
- 10…前掲書1、1785頁。

II 部

情報便利屋の日記

私は経団連のライブラリーに在職中「情報便利屋」を自称・自任し、「知りたいこと、調べてほしいことは、どんなことにも応じます」をモットーにしていた。

利用者のリクエストに応じてする仕事ではあったが、調べることは実に楽しいことであった。

実際のレファレンスのケースを紹介しつつ、1996年6月から2000年5月まで、科学技術振興事業団（現・科学技術振興機構）発行の月刊誌『情報管理』に34回にわたって連載したのが、「情報便利屋の日記」である。同誌の主な読者は、技術系の専門図書館員や情報処理の専門家であるにもかかわらず、ビジネス系のライブラリーに勤める私のこの連載を多くの方が愛読してくださったと聞く。

16〜20年も前のものがほとんどであるが、「本」で調べたものが多く、今でも参考になると言われるので、あえて転載・再掲することにした。

連載の中から11編を選んで一部リライトし、さらに4編を「日記」風に書き起こして添え、このⅡ部とする。

1 悪魔と天使

1996年、ゴールデンウィークが目前の4月某日。秘書室から「M役員が、野村総合研究所で出した『悪魔のサイクル』という本が欲しいとおっしゃっています」と電話。連休中に読みたい本の一冊なのであろう。わが経団連レファレンスライブラリー（以下経団連ライブラリー）には所蔵していない。しかしすぐに買えば良い。お茶の子さいさいだ。

しかし、野村総研でこんな書名の本を出版するとはめずらしいな——そう思いつつ、出版事項確認のため、インターネットでサーチする。

インターネットに直行したのは「役員が誰かから聞いた↓最近発行されたばかりのホットな本に違いない↓故に新しいものから探すべし」と考えたからである。

当時、TRC（図書館流通センター）のウェブサイトを開けば、過去16ヵ月分の新刊書籍について検索できた。簡単、簡単……。

ところが、検索結果は「該当する書籍はありません」。

JAPAN/MARC、丸善、いくつかの大学図書館……と、アクセスを繰り返したが、結果は

同じだった。

「灰色文献なのかしらん」と、今度は野村総合研究所のウェブサイトを開いて探してみる。が、みつからない。

次はオンラインデータベースだ。1986年以降国内で発行された書籍を情報源とする日外ASISTの「BOOK」を検索する。ところが、こちらも「ありません」。

エーッ！ どうしたのーッ!?

こうなったら、発行所に聞くしかない。野村総合研究所のことなら何でも知っている同研究所情報リソース部のY課長に電話してみると「イヤ、そんな本を出したなんて聞いたことありませんねエ」。

彼が知らなければいいのだ。「出版担当は隣の課だから一応聞いてみましょう」と尋ねてくれたが「やはり、出していないそうです」。

Y氏は同研究所の豊富な所蔵資料にも対象を拡げ、コンピュータを駆使して書名に「悪魔」を含む本の検索を試みてくれた。それでも、探すものはみつからない。本だけでなく、雑誌記事にもそんなタイトルのものはないという。

「そうですよねエ。そんなタイトルの本をオタクで出すはずがないですよねエ」と私。

しかし、どうしてみつからないのだろう。どこかの内部資料なのだろうか。それにしてもタイトルが商品的だ。

M役員が書名を間違えたとは考えられない。なぜなら、彼はメモ魔である。人と話していても、会議の時も、興味のあることはすぐにメモし、それを独自の方法で整理している。ライブラリーにレファレンスや資料のリクエストをする際も、メモを見て電話してくることが多い。今回の件も、おそらく、誰かにその本を紹介されたのである。それに「野村総研で出した……」というのがどうもひっかかる。「悪魔のサイクル」と「野村総研」の接点は必ずあるにちがいない。

「悪魔」の対語は「天使」である。私はY課長に「念のため、天使で探してみてくださいませんか」と頼んでみた。するとどうだろう。

『野村週報』に「天使のサイクル」というのがあります。1ページだけの記事ですがね」

やった！ 接点が見つかった！

ファクシミリでその記事を送ってもらって見ると、昭和62年12月7日号——つまり、9年も前のものであった。

「天使のサイクル」は「医薬品産業は次世代のリーディング産業である」という内容の記事であったが、締めくくりの文章が「ベストセラー『悪魔のサイクル』を振るわけではないが……」となっているではないか！

『悪魔のサイクル』は『まぼろしの本』ではなかった。しかもベストセラーだったとは！

まだ買えるものなら『日本書籍総目録』に出ているはずである。「1995年版」で書名から探すと、大前研一著『悪魔のサイクル——日本人のよりかかりの思考』（新潮文庫）が載っていた。

刊行年は1988年だ。

ヤレヤレ、野村総研ではなくて太前研一さんだったのか。マ、新潮文庫なら大抵の本屋にあるから、すぐに手に入る。それにしても、書籍のデータベースに、どうしてこんな重要な本のデータが漏れているのだ！ たたくモーツ！——心の中でブツクサ言いつつ、今度は書店に電話する。

ところが、どの書店も（大型書店でさえ）「ただいま品切れですので、お取り寄せになります」という。そんなに売れている本？ 最近のベストセラーのリストには入っていないけどなア。私だけでなく、物知りの野村総研のY課長も知らなかったけどなア……。

書店経由で取り寄せていてはゴールデンウィークに間に合わない。新潮社の友人に頼もう。

新潮社出版物のデータを端末で確認した営業部のわが友人は、電話の向こうで「昨年9月に絶版になっていきます」と言う。道理でTRCのデータにも書店の店頭にもないわけだ。『日本書籍総目録 1995年版』は95年6月発行なので、その後の9月に絶版になった本も収録されていたのである。

ただ、ここで「絶版だから」といって諦めるわけにはいかない。「どんなものでも必ず調達します」という「情報便利屋」としては、現物を届けなくては責任を果たせない。どこかの図書館にあるかもしれないが、これから所蔵館を探し出して借りに出掛けるのでは間に合わない。所蔵リストにあっても「行方不明」や「貸出中」の恐れもある。

絶版になっても出版社の倉庫に1〜2冊はあることを過去の経験で知っている。「倉庫で探して

著者プロフィール

村橋 勝子(むらはし・かつこ)

1966年4月 経団連(経済団体連合会)事務局入局。図書館部調査役(1989年4月、経団連事務局初の女性管理職)、年史グループ長(1995年秋から3年半兼務)、情報メディアグループ長を経て2009年10月に退職するまで一貫してライブラリー業務に従事。2001～2012年度、大妻女子大学非常勤講師を兼任。

在職中、専門図書館協議会の委員や幹事、日本図書館協会評議員(1989～2009)、東京都図書館協会理事、企業史料協議会理事(1991～2003)その他、関係団体の役員を多数務める。2010年6月から専門図書館協議会顧問。また、社史に関する研究では日本国内の第一人者。

『白書・日本の専門図書館1989』(専門図書館協議会)、『科学技術情報ハンドブック』(日本科学技術情報センター)、『情報探索ガイドブック』(勁草書房)、『図書館ハンドブック』(日本図書館協会、2005年以降)(いずれも分担執筆)のほか、図書館、社史の両分野で執筆文献、講演多数。研究テーマ・関心事項は、レファレンスサービス、専門図書館のマネジメント、専門図書館のPR、社史、企業家、産業遺産など。

情報便利屋の日記

—専門図書館への誘い—

2016年9月16日 初版第1刷発行

検印廃止

著 者© 村 橋 勝 子

発 行 者 大 塚 栄 一

発 行 所 株式会社 樹村房
〒112-0002

東京都文京区小石川5丁目11番7号

電 話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

<http://www.jusonbo.co.jp/>

振替口座 00190-3-93169

組版・印刷／美研プリンティング株式会社

製本／有限会社愛千製本所

ISBN978-4-88367-265-3

乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。